

ブダペスト通信

盛田 常夫



2024年 NO.6

3月25日

スキージャンプ小林陵侑、W杯総合2位で今シーズンを終える

先週末で、冬のスポーツシーズンが終了した。フリースタイルスキーで日本人選手の活躍が目立つのにたいし、伝統的なスキー競技（アルペンスキーやノルディックスキー）で、日本人選手が活躍する姿はほとんど見られなくなった。アルペンスキー競技会で日本人選手に出会うことはない。少し前までは男子回転競技で活躍する選手はいたが、今は皆無である。ノルディック複合には常にトップテンに入る選手がいたが、渡部暁人選手の力が衰えた現在、トップテンを争える選手はいない。辛うじて、女子複合の葛西春奈、優香姉妹がトップテンの争いに加わっているだけである。

2024年3月25日

こうした伝統的スキー競技で一人気を吐いているのが、スキージャンプの小林陵侑選手である。W杯参戦3年目の2018-2019年のシーズンで大化けした小林選手は、以後、スキージャンプ界のワールドクラスの選手になった。

2022-2023年の昨シーズンを総合5位で終えた小林陵侑はプロ転向1年目の今シーズン(2023-2024年)を総合2位で終えた。獲得賞金総額は338,600CHF(スイスフラン、およそ5600万円)で、オーストリアのクラフトに次いで2位となった。年末年始のジャンプ週間で3度目の総合優勝を飾った小林は優勝賞金10万スイスフランを上乗せし、ダントツで獲得賞金トップに躍り出たが、今期絶好調のクラフトがシーズン優勝回数を13に伸ばし、シーズン終盤3戦を残して賞金ランキングで小林を逆転した。その差は34,550CHFで今シーズンを終えた。クラフトがキャリア最高のシーズンを送った今季、シーズン2勝の小林が良く健闘したと評価されよう。

小林の今季の成績は、W杯全32戦中、優勝2回、2位10回、3位2回である。最大イベントのジャンプ週間では、4戦すべて2位で優勝なしに終わったが、各4戦の優勝者がすべて異なる波乱の中、安定したジャンプを続けた小林が総合優勝を飾った。最も伝統のあるジャンプ週間で、総合3度目の優勝は、アホーネン(5回、フィンランド)、ヴァイスフログ(4回、ドイツ)に次ぐ史上3位(4名の選手が名を連ねる)の成績で、スキージャンプの歴史に名を刻むことになった。ゴールドベルガーやシュリーレンツァウアーの2回優勝を超えた。

ここまでの小林のW杯の記録は以下の通りである。

小林陵侑選手のW杯成績

	W杯総合順位	優勝	2位	3位	表彰台計	獲得賞金額(CHF)	ジャンプ週間総合
2023-2024	2位	2	10	3	15	338,600	優勝
2022-2023	5位	3	2	1	6	57,900	18位
2021-2022	1位	8	3	0	11	306,400	優勝
2020-2021	4位	3	2	0	5	65,650	6位
2019-2020	3位	3	2	3	8	178,150	4位
2018-2019	1位	13	3	5	21	251,733	優勝

2018-2019シーズンで、小林はSF(スキーフライング)総合で優勝、Raw Airでも優勝し、ほとんどのタイトルを獲得した。

女子は伊藤有希が総合4位、高梨沙羅が9位で今シーズンを終えた。伊藤は長らく総合2位の位置をキープしていたが、終盤で振るわず4位に後退した。高梨は13季連続のトップテンを確保した。さすがに表彰台は遠くなったが、13季連続トップテンの記録が破られることはないだろう。また、W杯63勝は男女を通してダントツの記録であり、これも破られることはないだろう。女子ジャンプの黎明期に優勝を重ねたことが、この記録になっている。

2024年3月25日

51歳の葛西紀明が4期ぶりにW杯に参戦し、フィンランドのラハティ大会から出場した。予選で50位以内に入らないと本選に参戦できず、W杯の参加記録として認められないが、辛うじて予選をクリアして本選に参戦しただけでなく、1回目で30位以内に入り、2回目に進んだ大会が何度かあり、W杯ポイントを獲得した。W杯に参戦している選手のほとんどは、葛西が高校生でW杯に参戦したシーズン（1990-1991年）にはまだ生まれておらず、葛西の参戦は今シーズンの話題の一つになっている。さすがに20位より上位に食い込むことは難しいが、得意のスキー・フライングで210mを超えるジャンプを披露して、若い選手を驚かせた。

スキージャンプ台の種類

W杯で使用されるジャンプ台は男子がLH（large hill）、女子はNH（normal hill）が主流で、これにSF（ski flying）台が加わる。ジャンプ台の大きさ（傾斜と滑走の長さ）によって飛び出しスピードが異なり、安全に競技できる飛距離が異なることから、三種類のジャンプ台は明確に区別されている。3種類のジャンプ台を揃えている競技会場は少ない。ほとんどの会場はNHとLHの二種類の台を揃えているだけである。日本にはSF台はない。

NH台の初速（飛び出し速度）は90km/h以下に抑えられている。LH台のそれは90km/h前半であるのにたいしSF台の初速は100km/h前後である。同じNHあるいはLH台でも、それぞれのジャンプ台は微妙に形状が異なり、安全に飛ぶことができる飛距離の上限が設定（hill size、HS）されている。概ねNHのHSは100～110m前後、LHのHSは120～140m、SFのHSは220～240m前後である（FISの規定はもっと幅が広い）。これを超えると着地点に傾斜がなく、平らな雪面に落ちる感じになる。飛行機の着陸と同じで、傾斜のある着地面（landing bahn）に降りることができれば、スムーズな態勢をとることができるが、傾斜がなくなり平面に近い滑走路で降りる場合には、着地はドスンと落ちる感じになり、膝を痛める原因になる。着地で転倒することもある。転倒は大きな減点になる。

SF競技は事故の危険を伴うために、女子では競技種目に採用されていなかったが、昨シーズンからシーズンに1度だけ採用されるようになった。フライングでは競技者数が制限され、上位15～20名の技術のある選手に限定されている。今シーズンの女子SF競技（W杯第23戦ノルウェイのヴィケルスン、HS240m）では17選手が参加し、伊藤有希選手が5位、高梨沙羅選手が6位、丸山希選手が14位だった。日

本女子選手の最長飛距離（200.5m）は伊藤選手が保持しており、今シーズンも 1 回目に 200m を飛んだ。高梨選手はまだ 200m を超えたことがない。

今年のヴィケルスンで、ノルウェイのオプセット選手が 230.5m を飛び、これが現在のところ女子の世界記録である。男子はクラフト選手の 253.5m（同じくヴィケルスンで 2017 年に記録）が世界記録である。小林陵侑選手が 2019 年にスロヴェニアのプラニツァ台で記録した 252m は現在もなお、この台での最長記録である。なお、男子と女子では出発ゲート（出発点の高さ）が違うので比較できない。踏切のスピードを出すために、女子選手は男子選手よりかなり高いゲートから出発する。滑走距離が長く（出発ゲートが高い）、向かい風の条件に恵まればこのような大ジャンプが生まれるが、競技の安全を考慮して、向かい風が強い場合には、ゲートを下げて踏切速度を落とす設定が行われるので、これらの記録を破るのは簡単ではない。



Oberstdorf（ドイツ）の SF ジャンプ台。この村にはすべてのジャンプ台が揃っている。天空に出発ゲートがある。通常、W 杯ではこの台に加え、ノルウェイのヴィケルスンとスロヴェニアのプラニツァの 3 台が、スキー・フライング競技に使われる。

ジャンプ点の計算方法

スキージャンプは予選を通過した 50 名の選手で競われる。2 度のジャンプの合計点で順位が決まる。ただし、1 回目のジャンプで上位 30 名だけが 2 回目のジャンプに進むことができ、その 30 名だけが W 杯ポイントを獲得できる。

ジャンプの結果は飛距離点と飛型点で計算されるが、近年のシーズンでは風速（追い風は加点、向かい風は減点）による補正が行われている。また、風の影響を相殺するために、競技途中で出発ゲートを変えることがある。追い風が強い場合にはゲートを上げて踏切速度を上げ、向かい風が強い場合にはゲートを下げて踏切速度を下げる。ゲートを下げる場合には 1 ゲートごとに加点、上げる場合には減点される。ゲートの加減単位点はジャンプ台によって異なる。このように、飛距離点と飛型点の合計にゲートの 2 つの補正が加えられ、ジャンプの得点が決められる。

飛距離点は各ジャンプ台の K 点（K-point, Konstruktionspunkt, construction point）が設定されており、これが測定の基準になる。K 点を 60 点として、これを超えるジャンプには加点され、これに達しないジャンプは減点される。加点減点の単位はヒルサイズによって異なり、K 点が 120m の場合には、1m につき 1.8 ポイントの加点あるいは減点が行われる。

飛型点は飛行姿勢、着地姿勢（telemark、テレマーク）、滑走姿勢（着地後の滑走）を総合的に評価する。5 名のジャッジが 20 点満点で評価し、最高評価点と最低評価点を切り捨てた 3 名のジャッジの合計点（満点が 60 点）で決まる。テレマーク評価には審判の主観が入り易い。小林選手やクラフト選手は飛行姿勢も着地姿勢も綺麗で飛型点が高い。とくにクラフト選手の飛型点は常に高く出る傾向があり、見た目にほとんど差がなくても、0.5~1 ポイントの僅差でクラフト選手に軍配が上がるケースが何度かあった。今シーズンの小林選手は何度か 1 ポイント以下の差で優勝を逃した。2 位が 10 回という異例な順位が、今年小林選手の不運を教えてくれる。

斜面に着地する最適なソフトランディングの姿勢がテレマークで、両足を揃えて着地すると減点される。ヒルサイズを超えるジャンプの場合には、安全のために選手は両足を揃えて降りるが、これは減点の対象になる。日本の高梨選手は、ヒルサイズを超えないジャンプでもテレマーク姿勢が取れず、常に厳しく減点されている。これは選手の長年の癖で、簡単に修正が利かない。



スキーを交互させ、両手を開いた状態がテレマーク

屋外の小高い山から谷に向かって飛ぶスキージャンプは風の影響を受ける。しかも、単に向かい風や追い風だけでなく、横風も受ける。現在では踏切地点から着地点まで LH で 8 か所程度に測定器が設置されている。SF 台の場合測定器の数はもっと多くなる。

それなりの数の物理学者がスキージャンプの風力測定の研究を行っている。FIS（国際スキー連盟）がどのような測定方法を取っているのかの詳細が公表されていないので、計算方法は不明だが、踏切直後の風の方角と強さと、着地点近くの風の方角と強さの平均を計算していると説明されている。ジャンプのポイント計算では、向かい風（追い風）何メートルと表示され、風速に基礎単位ポイントを乗じたものを加算あるいは減算される。しかし、横風などは測定基礎になっていない。横風の突風を受け、バランスを崩して飛距離を伸ばせなくても、再試行はない。ここは運が成績を左右する。

すべての方向の風の強さが一定値以下でないと、ゲートからの出発が許可されない。強風が収まらない場合には 1 回目の飛躍で記録を決めることがある。競技全体が中止されることもある。葛西選手が参戦したラハティの LH で、W 杯リーダーのクラフト選手が踏切直後に横風を受けて失速し、2 回目に進めなかった。しかし、葛西選手は 1 回目に 30 位以内に入り、2 回目に進んだ。稀にこういうことが起こる。小林選手もオスロの大会で 1 回目に失速して、2 回目に進めなかった。同じく踏切直後に強い横風を受けたからと考えられる。この大会でクラフト選手が優勝して 100 ポイントを稼いだために、そこまでクラフト選手との総合ポイントの差を 200 ポイント以下まで縮めてきた小林選手は、この失敗ジャンプで追撃の道を断たれた。

W杯のポイントと賞金の算定基礎

2023-24年W杯は31戦行われ、各大会の得点（飛距離点+飛型点±補正点）で順位が決まる。一つの大会で上位30選手に与えられるW杯獲得ポイントは以下の通りである。

Individual Competitions

1 st place = 100 points	16 th place = 15 points
2 nd place = 80 points	17 th place = 14 points
3 rd place = 60 points	18 th place = 13 points
4 th place = 50 points	19 th place = 12 points
5 th place = 45 points	20 th place = 11 points
6 th place = 40 points	21 st place = 10 points
7 th place = 36 points	22 nd place = 9 points
8 th place = 32 points	23 rd place = 8 points
9 th place = 29 points	24 th place = 7 points
10 th place = 26 points	25 th place = 6 points
11 th place = 24 points	26 th place = 5 points
12 th place = 22 points	27 th place = 4 points
13 th place = 20 points	28 th place = 3 points
14 th place = 18 points	29 th place = 2 points
15 th place = 16 points	30 th place = 1 point

今季12勝したクラフト選手は優勝した大会だけで1200ポイントを稼いでいる。小林選手は2位の表彰台に立ったのが10回だから、これだけで800ポイントを獲得している。最終戦を終えた時点で、クラフト選手のW杯総合ポイントは2149ポイント、2位の小林選手の1673ポイントで、3位のヴェリンガー選手は1488ポイントだった。

日本選手の2番手の二階堂漣選手は449ポイントで総合22位、小林潤志郎選手は143ポイントで総合34位だった。ちなみに、終盤に参戦した葛西選手は10ポイントで総合58位だった。

今シーズンの賞金総額は個人戦1大会86,100CHF（スイスフラン）以上と規定されており（それより大きい場合もある）、2回目のジャンプに進んだ上位30選手に配分された。優勝者は13,000CHF、2位10,000CHF、3位8,000CHFと漸減し、30位は400CHFとなる。

各大会の予選勝者には3000CHFが、フライング大会予選勝者には5000CHFが賞金として与えられた。ただし、予選は本選参加者50名を絞るもので、記録の持越しはない。

さらに、ジャンプ週間（ドイツとオーストリアの 4 つのジャンプ台で競われるステージ）のようなステージ優勝者には特別優勝賞金が与えられる。小林選手はこのステージ優勝で 100,000CHF を獲得した。今シーズンから始まった 1 月のポーランドツアー（ポーランドの 3 つの台での大会ステージ）の優勝者クラフトは 50,000EUR を獲得した。クラフト選手は 3 月初旬の Raw Air Competition（ノルウェイの 3 つのジャンプ台での大会ステージ）でも優勝し、50,000EUR を獲得した。ノルウェイ・スキー連盟はスポンサーの獲得に苦戦しており、賞金額は前年より減額された。最終戦が行われたスロヴェニアのプラニツァでは予選、個人戦、国別対抗の個人ジャンプ 7 本を総合したポイントで Planica 7 と名付けられたステージの優勝者を決めており、今年の優勝者賞金は 20,000CHF だった。今年の Planica 7 はオーストリアのフーバーが優勝をさらった。フーバーはスキー・フライングの総合点（SF 競技大会の総計）でも、クラフトを抑え、フライング総合優勝を飾った。

来シーズンの展望

葛西選手より 20 歳年下のプレヴツ選手（Peter Prevc）が今季をもって競技から退くことになった。2015-2016 年のシーズンで大爆発し、W 杯 29 戦中 15 戦で優勝した。プレヴツ選手のシーズン最多優勝記録は、今年も破られることはなかった。2018-2019 年の小林選手と同様に、ほとんどのタイトルを総なめにした。スキージャンプでは何年かに一度、無双状態の選手が現れるから興味深い。

しかし、その後、プレヴツ選手は W 杯で結果を出せずに低迷し、31 歳となった今シーズン、引退を決めた。W 杯優勝回数は 24 回である。1 シーズンに 15 回も優勝したのに、その後、優勝を重ねることができなかった。また、昨シーズン、W 杯の総合優勝を争ったグラネルード（ノルウェイ）とクヴァツキー（ポーランド）はいろいろな事情が重なり、今シーズンは下位に低迷した。今シーズン、無双状態だったクラフト選手も、ここ数年はやや低迷していた。

スキージャンプは、なぜか、毎シーズン高いレベルを維持するのが難しい。それを考えると、高梨選手の 13 季連続トップテンという記録は驚異的なものだ。小林選手の 6 季連続トップテンも称賛される。多くの選手が 30 歳を過ぎて、全盛期の強さを失っていく。踏切の強さが失われていくからだと考えられる。高い運動能力を保持する葛西選手と同様に、小林選手も運動能力がきわめて高いことで知られている。小林選手は少なくともまだ 3~4 年はトップ水準を維持して世界のトップに立つ力を

もっている。オフのトレーニングを怠らず、もう一步、スキージャンプの歴史に名を遺す記録を作って欲しい。

それにしても、51歳の葛西選手の力を借りなければならないほど、日本のスキージャンプ界は人材が払底している。辛うじて、二階堂漣選手がW杯総合22位で、日本人2位の成績で今シーズンを終えた。今シーズンW杯参戦2年目で、来期以降が楽しみな22歳の選手である。二階堂選手に続く選手がもう2人欲しい。そうしないと、日本は団体競技を組めない。今年のプラニツアの国別対抗団体（スキー・フライング）で、日本は小林兄弟・二階堂・葛西のオーダーを組み、4位に入った。フライングが得意な葛西がいなければ5位以下になっていた。もう一人、二階堂並の若手がいれば、表彰台を争えた。

オーストリアやスロヴェニアを除き、どの国も世代交代の時期にあり、若い選手の台頭を期待している。スキージャンプは誰もが簡単に参入できるスポーツ競技ではないので、多くの国は選手層の薄さに苦しんでいる。空中を命綱なしで飛躍するスキージャンプは、リスクと成果が見合わない競技だが、そのスリリングな競技は観客を魅了する。スポンサーがもっと増え、選手層がより厚くなり、競技が活性化することを期待したい。